様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(A)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｈ００７７２

研究課題名（和文）防災と被災地復興の基盤を形成する地域災害資料・情報学の構築―国際比較の観点から―

研究課題名（英文）Establishing the science of local disaster archive forming the basis of disaster prevention and post-disaster recovery: from the perspective of international comparison

研究代表者
白井　哲哉（SHIRAI, Tetsuya）

筑波大学・図書館情報メディア系・教授

研究者番号：７０５６８２１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　30,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は災害に関する多様な資料の収集・保全及び情報発信につき国際比較に基づく調査研究を目的とした。
　研究成果は、第1に、福島県の原子力災害被災自治体の担当者と連携して、2018年にフォーラム「福島の震災遺産と震災アーカイブズの構築」を開催し震災資料の保存活用をめぐる現状と課題を明らかにした。第2に、福島県双葉町が保有する震災資料の調査を進め、研究成果をICADL2020DEで発表した。第3に、台湾、インドネシア、ウクライナの災害ミュージアムやアーカイブズで海外視察調査を実施し、調査成果を報告書「災害資料の国際比較」で公表した。第4に、研究代表者は2019年に単著『災害アーカイブ』を刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、日本国内で1990年代から着手された文化財レスキュー事業や史料ネット活動の実践について、アーカイブズ学の観点から学術的な調査研究及び実践活動を加え、新たな研究分野の確立を目指した。その成果として、英語圏など海外の学術的語彙には未登場である「災害アーカイブ　disaster archive」という概念を新しく提唱できたことは、学術的及び社会的に高い意義を認められる。
また本研究の重要な取り組みとして海外の災害アーカイブズ・ミュージアムの視察調査があったが、2022年以降の世界情勢の変化もあり貴重な調査となった。特にウクライナにおける調査成果は再度入手しがたい極めて重要なものとなった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to conduct research based on international comparisons on the collection and preservation of various materials related to disasters and the dissemination of information.
In 2018, we held a forum titled "Fukushima's Earthquake Heritage and Construction of Earthquake Disaster Archives" in collaboration with officials from local governments affected by the nuclear disaster in Fukushima Prefecture, and clarified the current situation and issues surrounding the preservation and utilization of earthquake disaster materials. In 2019, the research representative published a single author, "Disaster Archive". In 2020, we conducted a survey of earthquake disaster materials held by Futaba Town, Fukushima Prefecture, and presented the research results at ICADL2020. And we conducted overseas surveys at disaster museums and archives in Taiwan, Indonesia, and Ukraine, and published the survey results in the report "International Comparison of Disaster Materials."

研究分野：日本アーカイブズ学

キーワード：災害アーカイブ　災害情報　アーカイブズ　東日本大震災　災害ミュージアム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究の開始時点においては、まず、日本が世界有数の自然災害大国であること、今後の災害への対応は国家的要請であり、被災地の復興は国土の均衡した発展を進める上の重要課題であること、そこで今後の災害への備えとして、被災地の資料・情報の収集・保全、評価と選別、そして国内外への情報発信と活用に関する調査研究は急務であるとの現状認識が存した。

この点、研究代表者の研究領域の一つである歴史学では、1995 年の阪神・淡路大震災や 2011 年の東日本大震災の経験などを踏まえて「地域歴史資料学」の提唱に至り（奥村弘編『歴史文化を大災害から守る』東京大学出版会 2014）、その後も特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」として継続する研究動向が存する。この研究動向の基盤には、1995 年阪神・淡路大震災を契機に本格化した被災文化財（被災資料）の救出保全活動（文化財レスキュー）があり、その活動は全国の国立大学の人文系学部に拠点を置いた日本全土を覆うネットワーク構築に至った。

しかしながら本研究の開始時点では、被災文化財（被災資料）に関する調査研究は進展していたものの、災害発生に伴う被災実態や被災地の復興過程に関する諸資料（災害資料）に関する調査研究は、ごく一部の先駆的取り組みを除けば進んでいない状況にあった。被災資料の資料的価値は一般的な理解を得やすく、資料保全やその後の調査研究が比較的順調なのに対し、今の日々作成されつつある災害資料の資料的価値は必ずしも理解を得やすいとは言えなかったため、調査研究以前に資料保全自体が困難な状況にあった。

２．研究の目的

上記の研究背景を踏まえ、本研究では下記のように研究目的を定めた。

被災地復興に際して課題解決のための基本データは被災地で作成・収受された災害資料であり、世界各地でそれらの保存活用が図られている。しかし日本では一部の被災地を除き対応が不十分で、特に東日本大震災以降の災害ではそれらの資料や情報の保存も不十分である。今後の災害への備えとして、被災地の資料・情報の収集・保全、評価と選別、そして国内外への情報発信と活用に関する調査研究は急務である。そこで日本の実践と国際比較に基づく地域災害資料・情報学を構築する。

３．研究の方法

上記の研究目的を実現するため、本研究は二つの研究課題を設定した。

一つは、東日本大震災に伴う原子力災害被災地自体における諸資料を研究対象とした、震災資料の全体像の把握と、その組織化・情報化に関する方策の解明である。この実現に向け、本研究では福島県双葉町教育委員会と連携協定を締結して、同町役場が保有する震災資料の調査、保全・収集、整理に取り組み、その目録を作成した。そして、それらの情報発信を行うシステムを構築し稼働させた上で、そこから獲得された情報等の分析研究を行った。

もう一つは、第二の課題は、日本の震災資料が有する意義や価値、また資料の保存活用の方策に関する国際比較研究を通じた解明である。この実現のため、本研究では台湾（1999 年集集地震）、インドネシア（2004 年スマトラ沖地震に伴うアチェ津波被害）、ウクライナ（1986 年チェルノブイリ原子力発電所事故）、中国（2008 年四川大地震）の 4 か所で視察調査を計画した。

これらの調査研究を進めるうえで、各年度の調査地等において研究会を実施するとともに、研究対象フィールドである福島県双葉町を中心とする原子力災害被災自治体等の震災資料担当職員を招聘して情報収集及び意見交換のためのフォーラムを実施した。

４．研究成果

本研究の研究成果は、大きく四つにまとめられる。

第１は上記で述べた、福島県の原子力災害被災自治体の担当者等と連携して 2018 年 4 月にフォーラム「福島の震災遺産と震災アーカイブズの構築」を開催し、震災資料の保存活用をめぐる現状と課題を解明したことである。この成果は 2019 年 3 月に報告書を刊行した。ここでは目次のみ下記に掲載する。

・「震災遺産」と「震災アーカイブズ」（白井哲哉）
・ふくしま震災遺産保全プロジェクトについて（福島県立博物館　高橋満）
・双葉町における震災資料保全の取り組みについて（双葉町役場　橋本靖治）
・大熊町アーカイブズ検討委員会の活動について（大熊町役場　喜浦遊）
・富岡町におけるアーカイブ施設整備について（富岡町役場　門馬健）
・コメント１：震災アーカイブズを中心に―阪神・淡路大震災の経験から―
（神戸大学　佐々木和子）
・コメント 2（元筑波大学・長崎歴史文化博物館　水嶋英治）

第 2 はこのフォーラムの成果も踏まえ、研究代表者が本研究のテーマタイトルに掲げた「地域災害資料・情報」の概念化を目指した検討及び考察を行い、その成果を 2019 年 4 月に白井哲哉『災害アーカイブ　資料の救出から地域への還元まで』（東京堂出版）として刊行したことである。
第 3 はやはり上記で述べた、震災資料の情報発信システムの構築と、それを稼働させて得られたデータの分析研究である。これは ICADL2020 の報告「Analysis of Crowdsourced Multilingual Keywords in the Futaba Digital Archive : Lessons Learned for Better Metadata Collection」として公表した。
第 4 もやはり上記で述べた、台湾、インドネシア、ウクライナにおいて災害のアーカイブ施設及び遺跡等に対する現地視察調査を実施して、海外における災害アーカイブの現状と課題について学ぶ機会を得たことである。特にインドネシアでは Syiah Kuala 大学と連携して国際シンポジウム“PRESERVING AND USING DISASTERS ARCHIVES:LINKING JAPANESE AND INDONESIAN EXPERIENCES”を開催した。ここでは論題と報告者のみ下記に掲載する。

“Opening the Aceh Tsunami Museum and the Future Perspectives” (Rahmadhani SULAIMAN, the Aceh Tsunami Museum’s former director).

“Fukushima’s Disaster Heritage, Its Preservation and Use” (TAKAHASHI Mitsuru, Fukushima Museum, Professional curator)

“Information Systems for Use of Fukushima’s Disaster Archives” (SAKAGUCHI Tetsuo, Associate Professor Faculty of Library, Information and Media Studies, University of Tsukuba; KAWAKAMI Mari, Researcher Faculty of Library, Information and Media Studies, University of Tsukuba).

“Aceh’s Disaser Archives and Information Dissemination” (expected, Syiah Kuala University’s side)

. Comments: RAHMI (Graduate School of Library, Information and Media Studies, University of Tsukuba, PhD Course student)

これらの視察調査の成果は、2023 年 3 月に報告書を刊行した。ここでは目次のみ下記に掲載する。

・災害アーカイブの国際比較を目指して（白井哲哉）
・インドネシア・スマトラ沖大規模地震・津波に関する災害資料について
（神戸学院大学　水本有香）
・チェルノブイリと資料保存（神戸大学　佐々木和子）
・福島の震災遺産及びその保存活用（福島県立博物館　高橋満）
・柏崎市の震災対応から双葉町へ（福島県立博物館　筑波匡介）
・3.11 複合災害被災地の大字誌の成果・課題・問題点
（国文学研究資料館　西村慎太郎）
・台湾 921 集集大地震と震災史を伝えるミュージアム
（元福島県立博物館・淑徳大学　内山大介）
・インドネシア津波被災遺構とミュージアム・メモリアル（福島県立博物館　筑波匡介）
・インドネシアとウクライナの被災地を「観光」して（大熊町役場　喜浦遊）
・双葉町デジタルアーカイブの多言語キーワードの分析―より良いメタデータ収集のための提案―（
筑波大学　川上真理、阪口哲男、白井哲哉、松原正樹、森嶋厚行　元双葉町役場・富岡町役場　吉野高光）
・視察報告（富岡町役場　門馬健、三瓶秀文　福島県立博物館　大里正樹）

なおウクライナ調査視察を実施した 2020 年 3 月初旬を最後に、新型コロナウイルスの世界的感染のため海外視察が実施できなくなり、中国における現地視察調査は断念せざるを得なかった。また対面による研究会等も実施できなくなったこともあり、全体の研究総括は必ずしも十分とは言えなかった。

しかしながら 2 回のフォーラムや国際シンポジウム、3 回の海外視察調査によって、これまで日本はおろか海外でも十分検討されたことがなかった震災資料についての学術的検討を実現することができた。その成果として「災害アーカイブ　disaster archive」の概念化に至ったことは一つの到達点であり、次の研究活動へつなげることができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 白井哲哉	４．巻 114-3
２．論文標題 図書館の被災から学ぶこと	５．発行年 2020年
３．雑誌名 図書館雑誌	６．最初と最後の頁 125,127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Talhath Nishad; Sakaguchi Tetsuo; Nagamori Mitsuharu; Sugimoto Shigeo.	４．巻 -
２．論文標題 Yet Another Metadata Application Profile (YAMA): Authoring, Versioning and Publishing of Application Profiles.	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Proceedings of International Conference on Dublin Core and Metadata Application 2019	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Talhath Nishad; Nagamori Mitsuharu; Sakaguchi Tetsuo; Sugimoto Shigeo.	４．巻 -
２．論文標題 Authoring Formats and Their Extensibility for Application Profiles.	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Digital Libraries at the Crossroads of Digital Information for the Future	６．最初と最後の頁 116,122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 水本有香	４．巻 5
２．論文標題 カンタベリー地震に関する震災資料の現状	５．発行年 2019年
３．雑誌名 現代社会研究	６．最初と最後の頁 192,203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 白井哲哉	4．巻 30
2．論文標題 原子力災害被災地におけるアーカイブ事業の一考察	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Museum study　明治大学学芸員養成課程紀要	6．最初と最後の頁 211-218
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 新井 叡樹、阪口 哲男	4．巻 28(2)
2．論文標題 LOD データセット間のリンクにおけるクラウドソーシング適用の試み	5．発行年 2018年
3．雑誌名 情報知識学会誌	6．最初と最後の頁 134-139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2964/jsik_2017_011	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 水本有香	4．巻 396
2．論文標題 「福島の震災遺産と震災アーカイブの構築」参加記	5．発行年 2018年
3．雑誌名 地方史研究	6．最初と最後の頁 66-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 白井哲哉	4．巻 14
2．論文標題 原子力災害被災地における民間アーカイブズ救出・保全の課題―福島県双葉町における実践から―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 国文学研究資料館紀要　アーカイブズ研究篇	6．最初と最後の頁 27p-42p
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 水嶋英治	４．巻 119
２．論文標題 ミュージアム建築を歩く旅(ＸⅢ)　災害遺構の地政学	５．発行年 2017年
３．雑誌名 ミュゼ	６．最初と最後の頁 16p-19p
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　5件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 佐々木和子
２．発表標題 阪神・淡路大震災を残すために
３．学会等名 第18回歴史文化をめぐる地域連携協議会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 添田仁
２．発表標題 水損した歴史資料は被災地の文化資源となりうるか
３．学会等名 総合資料学 2019年度第2回地域連携・教育ユニット研究会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Suzuki Rikuya, Sakaguchi Tetsuo, Matsubara Masaki, Kitagawa Hiroyuki, Morishima, Atsuyuki
２．発表標題 CrowdSheet: Instant Implementation and Out-of-Hand Execution of Complex Crowdsourcing
３．学会等名 34th IEEE International Conference on Data Engineering(ICDE 2018)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Sakaguchi Tetsuo, Kawakami Mari
２．発表標題 Experiments for International Cooperation Utilizing Crowdsourcing in Earthquake Disaster Archives of Futaba Town at Fukushima Prefecture
３．学会等名 “PRESERVING AND USING DISASTERS ARCHIVES:LINKING JAPANESE AND INDONESIAN EXPERIENCES”（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Suzuki Rikuya, Sakaguchi Tetsuo, Matsubara Masaki, Kitagawa Hiroyuki, Morishima, Atsuyuki
２．発表標題 CrowdSheet: An Easy-To-Use One-Stop Tool for Writing and Executing Complex Crowdsourcing
３．学会等名 Advanced Information Systems Engineering 30th International Conference, CAiSE 2018（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 西村慎太郎
２．発表標題 原子力災害地域の知の往還-地域持続を目指して-
３．学会等名 高麗大学校グローバル日本研究院・国文学研究資料館第二回フォーラム「アジアにおける知の往還-記録と記憶-」（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 西村慎太郎
２．発表標題 福島第一原子力発電所事故と地域歴史資料の保全・継承
３．学会等名 第34回人文機構国際シンポジウム「市民とともに地域を学ぶ－日本と台湾にみる地域文化の活用術」
４．発表年 2018年

１．発表者名 西村慎太郎
２．発表標題 浪江町請戸・双葉町両竹における歴史と文化の継承について
３．学会等名 ふくしま歴史資料保存ネットワークシンポジウム「ふくしまの未来へつなぐ、伝えるⅡ-地元から立ち上がる資料保全と歴史叙述-」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 白井哲哉
２．発表標題 原子力災害の被災自治体における資料レスキューから災害アーカイブズの構築へ
３．学会等名 第5回全国史料ネット研究交流集会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 白井哲哉
２．発表標題 二十世紀郷土史家の歴史的位置
３．学会等名 近現代史研究会拡大例会
４．発表年 2017年

１．発表者名 白井哲哉
２．発表標題 東日本大震災の原子力災害被災自治体が保有する災害資料
３．学会等名 国際シンポジウム「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立をめざして」
４．発表年 2017年

１．発表者名 白井哲哉、川浦瑞花
２．発表標題 震災アーカイブズの保全から活用へ―福島県双葉町の活動事例から―
３．学会等名 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会第43回全国大会ポスターセッション
４．発表年 2017年

〔図書〕　計6件

１．著者名 辻泰明	４．発行年 2019年
２．出版社 大学教育出版	５．総ページ数 148
３．書名 インターネット動画メディア論―映像コミュニケーション革命の現状分析―	

１．著者名 歴史学研究会編、阿部浩一ほか	４．発行年 2019年
２．出版社 歴史を未来につなぐ：「3・11からの歴史学」の射程	５．総ページ数 332
３．書名 東京大学出版会	

１．著者名 菅豊・北條勝貴編、西村慎太郎ほか	４．発行年 2019年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 512
３．書名 パブリック・ヒストリー入門	

１．著者名 白井哲哉	４．発行年 2019年
２．出版社 東京堂出版	５．総ページ数 231
３．書名 災害アーカイブ　資料の救出から地域への還元まで	

１．著者名 内山大介、泉田邦彦、西村慎太郎（編）、白井哲哉	４．発行年 2018年
２．出版社 人間文化研究機構公領域連携型基幹研究プロジェクト	５．総ページ数 67
３．書名 新しい地域文化研究の可能性を求めてVol.5　地域歴史資料救出の先へ	

１．著者名 渡辺浩一、西村慎太郎、内山大介、泉田邦彦、白井哲哉	４．発行年 2018年
２．出版社 人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト	５．総ページ数 66
３．書名 新しい地域文化研究の可能性を求めてVol.5　地域歴史資料救出の先へ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

福島県双葉町の東日本大震災アーカイブズ
http://www.slis.tsukuba.ac.jp/futaba-archives/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	バールィシェフ　エドワルド (BARYSHEV Eduard) (00581125)	筑波大学・図書館情報メディア系・助教 (12102)	
研究分担者	阪口　哲男 (SAKAGUCHI Tetsuo) (10225790)	筑波大学・図書館情報メディア系・准教授 (12102)	
研究分担者	照山　絢子 (TERUYAMA Junko) (10745590)	筑波大学・図書館情報メディア系・助教 (12102)	
研究分担者	辻　泰明 (TSUJI Yasuaki) (30767421)	筑波大学・図書館情報メディア系・教授 (12102)	
研究分担者	宇陀　則彦 (UDA Norihiko) (50261813)	筑波大学・図書館情報メディア系・教授 (12102)	
研究分担者	水嶋　英治 (MIZUSHIMA Eiji) (70372886)	筑波大学・図書館情報メディア系・教授 (12102)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関